

梨の花プロジェクト

根本アリソン*

Okuma & M.U.E. Friendship Programme

Alison. K. NEMOTO

要旨：現在、福島県大熊町は、福島第一原子力発電所事故以降、町機能を福島県会津若松市に移している。それを受けて、「梨の花プロジェクト」と題して平成24年9月18日から9月21日の4日間に、宮城教育大学の教員1名と学部学生17名が会津若松市へ赴き、大熊町の幼稚園、小学校、中学校において教育支援等を行った。本稿は、その教育支援についての実践報告と、実際に現場に赴いて活動を行った学生の感想をまとめたものである。

キーワード：学び合い、教育支援、原発事故

1. はじめに

今となって、知らない人はいない「福島第一原子力発電所」は福島県、浜通りの双葉町と大熊町にある。私と大熊町の関係は平成10年5月から始まったが、平成23年3月11日に突然大きな変化を迎えることとなった。



私は、平成元年にイギリスから来日し、福島県の原町市や小高町（現在南相馬市）の教育委員会で勤めた。その後子育てで一時休職したが、職場復帰をしようと思った時に大熊町の教育委員会を訪ね、採用して頂いてから、大熊町との強い絆が生まれた。

最初の4年間は大熊中学校に英語指導助手として勤務していた。平成14年度から文部科学省の指導要領改訂により、小学校で「総合的な学習の時間」に英語活動を行うことが可能になってからは、町の「小学校専門・外国人英語講師」となった。それから9年間、1年生から6年生、毎年約700人の児童の英語教育を担当してきた。週の半分ずつ大野小学校と熊町小学校で勤務し、学校行事、PTA活動や地域のイベントなどに楽しく取り組んだ。さらに20年間以上続いた姉妹都市交流の担当者として多くのオーストラリア人を迎え、町長の通訳をするためにオーストラリアへ出張したこともある。

当時の英語活動はどちらかと言うと問題や課題が多く、私自身も指導方法や様々なやり方について悩む時が多くあった。町の教育長の武内敏英先生には、熱い信頼を寄せて頂き、長い間励み続けることができた。「アリソンに任せたので、ぶれないで、好きなようにやりなさい」といつも言って頂いた。試行錯誤を



* 宮城教育大学

くり返ししながら、自由に実践をさせて頂いたからこそ、現在のレッスンスタイルが発見できたのだと思う。大熊町の小・中学校での13年間は私を指導者として成長させてくれた、欠かせない期間であった。最高の職場で、面白い経験や挑戦する機会を数えられないほど与えて頂いたことに感謝している。

このような、教育熱心で、平和な田舎町がある日、津波と原子力事故による甚大な被害を受け、元の場所から消えてしまった。現在、大熊町は町機能を会津若松市に移し、役場、学校などの行政サービスを町民に提供し続けている。私は、今年度本学に来てから、何か大熊町のためにできないかと考えた。そして、学生を連れて教育支援ができれば、学生自身に良い経験になり、長い間お世話になった大熊町には少しばかりの恩返しができると思い、このプロジェクトを立ち上げたのである。

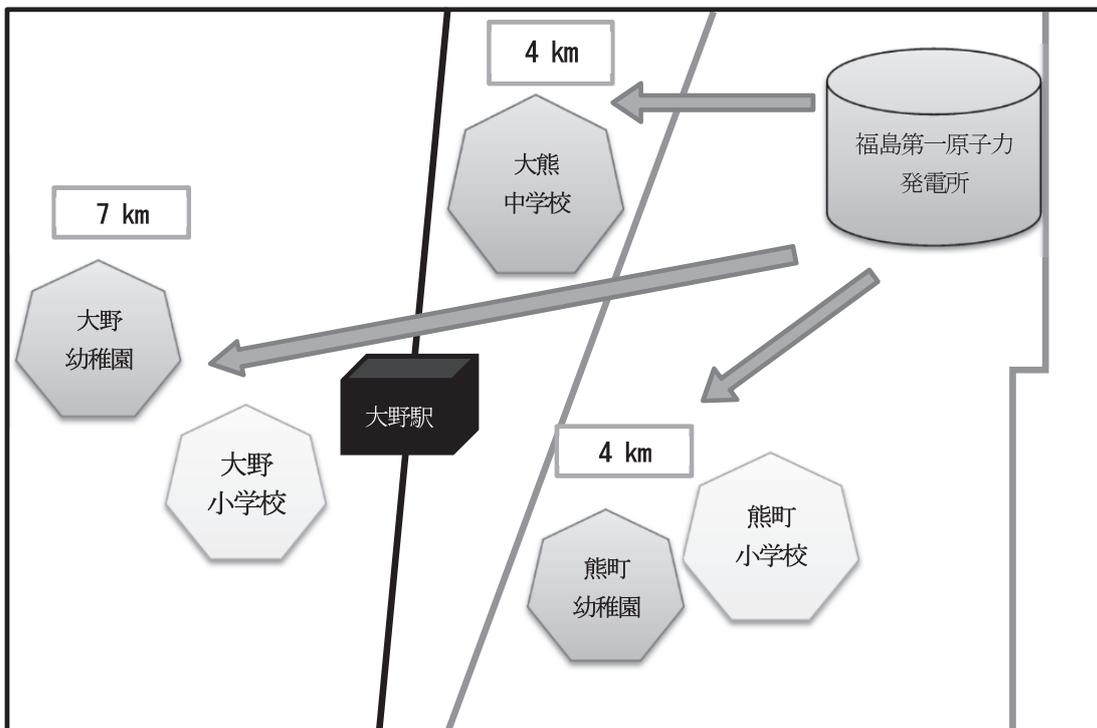
2. 大熊町の現状

2.1 大熊町の紹介

大熊町は、福島県浜通りの中央部、双葉郡に所在する。海と山に囲まれており、自然豊かな田園風景に恵まれた町である。気候が温暖であるため、自然の四季折々の姿を楽しめる。春には日隠山の山登り、夏には熊川の海水浴場と、毎年大勢の人が訪れる。「フルーツの香り漂うロマンの里 大熊町」というキャッチフレーズがあり、豊かな自然を活かして、梨、キウイフルーツの生産量が多く、全国に向けて出荷されている。

2.2 震災後の大熊町

平成23年3月11日、東日本大震災が発生し、大熊町は大きな被害を被った。大熊町は、福島第一原子力発電所の1号機から4号機の所在地でもあり、原発事故を受けて、多くの住民が退避を余儀なくされている。原発に最も近く、熊町小学校周辺の空間線量は今でも40 ($\mu\text{Sv/h}$) で、子どもたちにとって訪れることも不可能な地域となっている。現在、大熊町は町機能を会津若松市に移し、役場、学校などの行政サービスを町民に提供している。



大熊町の施設と原子力発電所の地図

3. 梨の花プロジェクトの概要

3.1 梨の花プロジェクトのねらい

将来、震災を体験した子どもを支える教員には、強い思いと優しい心が欠かせないと考えた。その心を育てるためには、実際に出向いて、子どもと関わる体験を通して学ぶことが一番であると思い、梨の花プロジェクトを企画し、本学の学部学生に座学だけでは学べないことを経験してもらいたいと考えた。

3.2 梨の花プロジェクトについて

「梨の花プロジェクト」というプロジェクト名は、大熊町の町花が梨の花であることから名付けた。梨の花プロジェクトの参加者は、宮城教育大学の4年生1名、1年生16名の計17名である。いずれも、英語教育専攻、英語コミュニケーションコースの学生であり、実施期間は、平成24年9月18日から9月21日の4日間である。大熊幼稚園、大野小学校、熊町小学校、大熊中学校に数名ずつ別れて、先生方のサポートや、児童・生徒の学習支援を行った。

2012 梨の花プロジェクト行程表

月/日	曜日	時間	内容	備考
9月18日	火	10:00	大学（七十七銀行本店前）集合・出発	【宮教大マイクロバス】
		13:00	会津若松市「ルートイン会津若松」着 ※昼食は状況を見て途中または到着後に済ます	
			大熊町教育委員会訪問⇒教育長挨拶⇒事前指導（ミーティング）	【徒歩移動】
9月19日 ～ 9月20日	水～木		ホテル発⇒学校着⇒ボランティア活動 ※昼食は給食が用意される	【スクールバス移動】
		活動終了・学校発⇒ホテル着	【スクールバス移動】	
9月21日	金		ホテル発⇒学校着⇒ボランティア活動	【スクールバス移動】
			※昼食は給食が用意される	
			活動終了・学校発⇒ホテル着	【スクールバス移動】
		17:00	ホテル出発	【宮教大マイクロバス】
		19:30	大学（七十七銀行本店前）着	

4. 学生の感想

4.1 幼稚園

○今回のボランティアプロジェクトに参加して、大熊町の皆さんが、原発事故によって自分たちの町に帰れないつらい状況の中でも、真摯に未来を見つめ、子供たちのためにレベルの高い教育を行っているのだと、よくわかりました。どんな状況においても、「子供たちがいてくれなければ、将来を担う人材がいらない、だから子供たちにできることをしてあげよう」という姿勢に、大変感動しました。そして、私も、レベルの高い教育に触れたことで、自分のこれからの勉学によりいっそう励み、将来を担っていく子供たちに、できる限りの教育を提供できる教師になろうと、改めて心に強く思いました。（英語教育専攻1年 十枝内 美里）



○私は普段、中等教育専攻として学んでいますが、今回は幼稚園でのボランティア活動ということで3日間、大熊幼稚園の方でお世話になりました。最初は、幼稚園児としばらく交流していなかったのですが、うまく幼稚園児と触れ合えるか不安がありました。幼稚園児が無邪気に私のもとに駆け寄ってきて、「お姉さん、一緒に遊ぼう！」と声をかけてくれるので、そんな不安はすぐに消え、いつの間にか、幼稚園児と遊ぶことに夢中になっていました。最終日は、本当に幼稚園児たちと別れるのが寂しく、ずっと一緒に遊んでいたいと思いました。素直で純粋な子どもたちが、これからも健やかに成長してほしいと本気で思いました。幼稚園児と交流したことで改めて、教育の大切さに気付けたように思います。中等教育とは別の視点で教育について考えることができた貴重な4日間でした。今後は中等教育という枠にとらわれず、幼稚園教育から通しての教育について学んでいきたいと思いました。(英語教育専攻1年 久光 香奈)

○英語活動の手伝いをするのかと思っていましたが、三日間子どもたちと遊んでいるだけで、ボランティアになっているのかと不安になりました。しかし先生方に、あまり他の所から私たちのように来てくれる人がいないから子どもたちも嬉しいと思う。と言われた時に、きちんとボランティアになっていると感じました。子ども一人ひとりが線量計を付けているのと、「～仮設住宅」と書かれたものがかばんに付いているのを見たときには驚きと、現実を突き付けられました。私も被災者の一人ですが、一年半経った今では、震災前と変わらない生活をしています。家も以前と同じ、家族もいる、何不自由のない生活を送ることができています。しかし、大熊幼稚園の子どもたちは自分たちが住んでいた場所とは違うところに今住んでいます。私は震災前と同じ生活ができていることはとてもありがたいこと、幸せなことだなと実感しました。(英語コミュニケーションコース1年 季 裕霞)



○私たちは大熊の子どもたちに少しでも元気を与えられればと思って今回訪問しましたが、私たちのほうが想像以上に子どもたちから元気をもらいました。子どもたちの笑顔や元気からは地震のことや原発のことはみじんも感じられませんでした。だからこそ今は難しいかもしれませんが、大熊の方々や子どもたちが早く大熊に戻ることができるようになればと思います。子どもたちの姿から毎日一生懸命に、楽しく過ごすことを改めて考えさせられました。お手伝いということで先生方の力になれたかはわかりませんが、私は今回大熊幼稚園に行って非常によかったと思っています。ぜひまた機会があったらボランティアなどで行きたいと思います。(英語コミュニケーションコース1年 阿部 夏生)



○今回は自分にとって初めてのボランティア活動となりました。ボランティアをしてみたいとは以前から思っていたものの、なかなか都合が合わなく、できていませんでした。しかし、今回福島県大熊町の幼稚園、小学校、中学校へ泊りがけでボランティアに行くというプロジェクトに参加させていただくことができるとも良い経験になりました。いま自分の家に帰ることができない子どもたちはどんな気持ちでいるのだろう、元気にしているだろうか。そんな心配ばかりして福島へと向かいましたが、子どもたちはそんな不安も一瞬で吹き飛ばすくらい元気でした。

私は幼稚園に行きましたが、最後のお別れをするとき子どもたちに「また遊ぼうね!!」と言われました。私は機会があれば、また大熊町の子どもと一緒に遊びたい、そう思いました。(英語教育専攻1年 茂泉 宥哉)



○アリソン先生を通じ「梨の花プロジェクト」の名前を掲げて、福島の会津を訪れた。私はボランティア活動をした三日間のうち、初日は幼稚園、残りの二日間は中学校を訪れた。今回の収穫は、少しでも現地の方に自分が役に立てたことや交流をもてたこと、教育の在り方を学んだことにあると思う。さらに、訪問した福島の教育の状況を見ていたが、自分の予想に反してかなり生き生きとしている。原発の影響もあり、教育がはたして成り立っているのだろうかと考えたが、むしろ素晴らしいと思えるくらいの状況だった。教育委員会や教員の方が自分たちなりの目標をもって突き進んでいることもわかった。そこからは自分がもし教員になった時にあるべき姿を教わった。

ここからもっとボランティア活動をするうえで、自己の学びに対する考え方を形成したり、将来を切り開いていく糧にしたい。(英語教育専攻1年 多田 健悦)

4.2 小学校

○私が3日間の中で特に考えさせられたのは、叱ることの大切さである。1日目に自習の時間があり、私はうるさくして周りに迷惑をかけている児童を、一度で静かにさせることができなかった。ボランティアという身でもあり子どもたちと仲良くいなければならないという気持ちもあったため、なかなか強く叱ることができなかった。しかしそれは子どものためにならないし、まず友だちに迷惑をかけるようなことをしていたら必ず考えさせなければならない、自分の行動を振り返らせ反省させる必要があると実感した。あとから担任の先生に伺ったところ、



その児童は家庭で引っ越しをするかどうかの話し合いの最中で、子どももストレスを感じているとのことであった。学校で少し落ち着きがなかったり、甘えたがったりする原因が震災にあるのに叱らなければならない、という現実が私にとっては辛かったのだが、子どものためにも、学級を運営していくためにも、叱るということは本当に重要なことであると感じた。(英語コミュニケーションコース4年 大井 明莉)

○子どもたちが自宅での出来事を「仮設でね、」という言葉で語りはじめたり、首から線量計をぶら下げて生活している姿には胸が熱くなりました。楽しそうに学校生活を送っている子どもたちですが、やはりどこかで辛い気持ちを抱えているということがうかがえました。最後の日にもらった手紙の中に「いなくなってもみんなでがんばりたいです。」という言葉を見つけました。子どもたちは確かに毎日それぞれが「がんばって」いるのです。そのことを知ってわたしが思ったことは、住んでいる場所は離れていてもわたしもみんなと「がんばりたい」ということです。そんな気持ちをこめて子どもたちひとりひとりに書いた最後の手紙はすべて「だいすき」でしめくくりました。受け取った子どもたちは「だいすきって書いてある!」と行ってにこにこしながら喜んでくれました。私が子どもたちからうけとったあたたかい気持ちをまっすぐに言葉で返すことで、子どもたちもその気持ちをうけとってくれるということをまたうれしく思いました。(英語コミュニケーションコース1年 渡辺 涼子)

○今回の活動を通じて私は主に大野小学校の2年1組の15名の児童と触れ合いました。別れ際には児童一人一人がメッセージを書いた紙を私にプレゼントしてくれました。今仙台に帰って来てからも何度も何度も読み返しています。それだけ私の大切な宝物になりました。ありがとうございますと伝えても伝えきれません。本当にありがとう。しかし、このように無邪気で活発な児童達の学校生活の裏にも未だ東日本大震災の爪痕は残っています。校舎は大野小学校、熊町小学校ともに本来の校舎を使わず、仮校舎を使っている状況。それにより通う児童全員がスクールバスでの通学。そして児童全員の線量計の常備。小学生には重すぎる現実です。もっともっと被災地に対する支援が必要なのだと改めて実感しました。この福島での4日間の活動を通して、改めて私自身の夢を再確認することができました。それは小学校の教員になること。このことを再び一から見つめなおし、学習し、体験し、良い教員になればと思います。(英語コミュニケーションコース1年 林 幸輝)



○今回、大熊の小学校を訪れて私の印象に残ったことは、東日本大震災以降複雑な環境に置かれながらも、子供たちがとても元気に登校している、ということであった。決して忘れることのできない、3.11東日本大震災では、今回訪ねた大熊の子供たちも非常に大きな揺れを経験し、原発事故が原因で自分の住んでいた土地を追われ、恐怖と不安で一杯であったはずである。そのような環境に置かれていながらも子供たちは元気いっぱい私たちを受け入れてくれ、私たちが元気をあげるどころか、逆に多くの元気を私たちに与えてくれた。このボランティアの3日間という短い時間の中で、教育の現場が一体どのようなものなのか、子供たちとどのように接していけばいいのか、少しわかったような気がする。これからの大学生活の中では教育実習など、現場に立つ経験が多くなっていく。今回のボランティア活動で得た経験は、今後の私の人生においても大変大きな意味を持つ経験ではなかったかと思う。(英語コミュニケーションコース1年 佐藤 貴洋)

○今回私は熊町小学校の1年生の教室に3日間入ってボランティアをしましたが、教室にいるすべての児童が元気で驚きました。大熊の人たちは、似た境遇の仲間や家族に囲まれて、これから5年間、それ以上を生まれた土地から離れて暮らすことになるでしょう。しかし、故郷に戻れなくても、人と人の間に流れる感情に居場所、故郷を見出し、前を向いて歩いてほしいと思いました。小学生は前を向いて進んでいました。3日間、私は小学生に元気を分けて戻る予定でしたが、逆にたくさんの元気をもらいましたし、放射能に縛られずに過ごせることや、帰りたいたときに帰る土地があること、これがどれほど特別なことなのか、ということに気づかされました。また、小学生から、先生から学ぶことが多い、私にとって実りある3日間となりました。(英語コミュニケーションコース1年 小山内 早織)



○子どもたちと触れあっていて子どもたちがみんな何かを身に着けていることに気づきました。最初は防犯のための道具か何かと思っていたのですが、「これは何？」と聞いてみると「線量計だよ！」と無邪気に答える姿を見てとても複雑な気分になりました。また、給食の時間に子供たちと話していた時も「海の方はマイクロシーベルトが

たくさんあるから死んじゃうよ！」とか「津波がきたでしょ？」と話し始める子もいて、東日本大震災が子どもたちの心に与えた影響を改めて実感しました。でも子供たちの無邪気で元気な姿を見てほっとした部分もあります。最後の日には子供たちが1人1人手紙を書いてくれました。とても嬉しかったです。自分もみんなにこれからも勉強を頑張ってもらいたいという思いを込めて鉛筆をあげながら「ありがとう」といいました。最後のさようならの後に1人1人と握手しながらみんなに口を揃えてまた遊ぼうと言われた時はとても切ない気持ちになりました。(英語コミュニケーションコース1年 鈴木 雄大)

○初めてのボランティアということで初日はとても緊張して学校から逃げ出したくなったほどでしたが、実際の活動を通して得たものはとても素晴らしいものでした。私たち宮城教育大学の学生のほとんどが目指している教師という職業。大学に入学したての自分にとって教師というものは、自分が生徒であった時にその視点から見た表面しかわからない不確かなものでした。教師という仕事がどれだけ大変な仕事であるかということは今回の活動を通して初めてわかりました。しかしそれと同時に教師という仕事がどれだけ楽しく、やりがいのある仕事であるかわかりました。もちろん自分はあくまでボランティアだったので実際の先生とは少し異なる立場での活動ではありましたが、それでも子供たちと関わる中で貴重な経験が出来ました。特に「教える」ということと「叱る」ということを経験できたのは大変勉強になりました。(英語コミュニケーションコース1年 庄司 隼也)



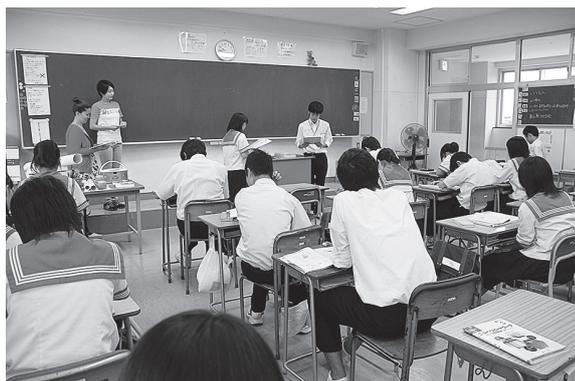
4.3 中学校

○私は、この三日間で少しでも福島の被災した子供たちのために何かできればと思ってこのボランティアに参加しました。実際に活動してみて、私たちにできたことはわずかで、逆にベテランの先生方の授業を見学できたことでたくさんのことを学ぶことができました。1日目の中学校では、全国的に有名な畑中豊先生のもとで活動を行いました。まず、畑中先生の授業を見学させていただきましたが、その授業は衝撃の連続でした。生徒たちの英語学習に対する意欲がとても高いことに最初は衝撃を受けました。英語は使えなければ意味がないので、このように覚えた英語を活用する多くの機会を授業で作っていくことが必要だと思いました。私も畑中先生のような、生徒を引き付ける授業をできるようにこれからも勉学に励みたいと思いました。(英語教育専攻1年 西岡 慧)

○私たちは福島県の大熊中学校を訪れました。私たちは今回、学習支援という形で訪問させていただいたのですが、むしろ、こちらが勉強させていただいたという印象が強く残っています。福島県を訪れる前に私が想像していたのは、授業



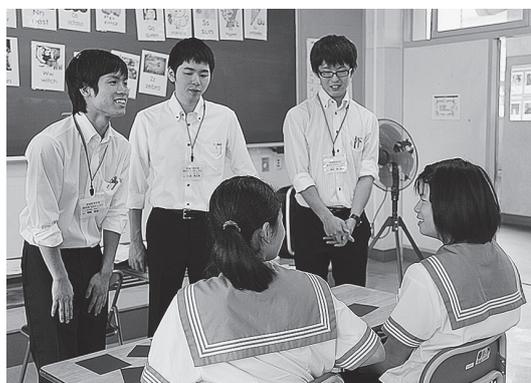
用の道具を運んだり、テストの採点をするなどといった、先生方のサポートがメインとなるのではないかと、いうことでした。しかし、実際はそれらの仕事はあまり多くなく、授業を見学したり授業中に生徒とコミュニケーションをとったりするのが主な活動でした。私が今までに見たことのないスタイルでの授業を展開している先生もいて、いい刺激になりました。何度か会話練習に混ぜてもらったり、音読のお手本を見せたりするという機会を与えられ、貴重な体験となったと思っています。また、それらのような授業中の諸活動がどのような役割を果たしているのかなど、色々と考えさせられることが多くありました。(英語教育専攻1年 藤本 聡一郎)



○私は中等教員養成課程で英語を専攻しており、中学英語教育でたいへん著名な畑中先生の授業を見学したことは本当にいい経験になりました。畑中先生の授業は終始パワーポイントを使ったスライドを使って行われ、生徒は授業中にノートをとることはなく、授業の大半は畑中先生と生徒との対話で進行していました。教師と生徒双方に英語を使う時間が多くあり、実生活の中のコミュニケーションを想定した授業になっていました。その上、ただ授業がクリエイティブというだけでなく、その創意工夫のすべてが生徒の英語力の上達に

直結しており、そのことが授業中の生徒の発音や使う文法から十分にわかりました。3日間を通して、授業や清掃活動などで生徒の皆ともおおく触れ合うことが出来ました。教師を目指す自分にとって実際に生徒と触れ合う経験は本当にいい経験になりました。生徒の皆はとても元気いっぱい、ボランティアにいった自分が逆に元気をもらってしまうくらいでした。(英語教育専攻1年 堀籠 崇志)

○梨の花プロジェクトによる教育支援のボランティアに参加し、私は多くのことを学ぶことができました。大熊中の生徒たちは困難な状況にも関わらず、積極的に熱意をもって様々な活動をしており、かえって私が元気をもらってしまうくらいでした。部活動においては、一生懸命に励み、目前に控えた新人戦への壮行会では選手たちの決意の言葉に感動しました。また、OECD 東北スクールの活動で世界に復興をアピールしようと生徒たちが大きな規模で動いている様子を知り、復興へと中学生たちも力強く立ち上がっているということを感じました。(英語教育専攻1年 相澤 幸之助)



5. 終わりに

今回のボランティア活動に参加したみなさんの感想文を読んでもと、不安な気持ちで故郷を離れ、辛い避難生活を1年半続けている大熊町の子どものための温かい歓迎を受けて感動したり、元気な姿を見て驚いたりする学生が多いと感じた。私から見ても、本当に子どもたちの笑顔は変わらず素敵であった。このように安心して普通に学校生活を送ることができるのは、その裏にいつも支えてくれている大人たち、親や教員の努力や工夫があるからだということを改めて実感した。

最終日の別れの時に、「また冬に是非来てくださいね。雪はすごいですよ。」という言葉を受けたので、2回目の「梨の花プロジェクト(冬)」は平成25年2月12日から15日まで行うことになった。第二回目は第一回目より8

人多い、25名、学年・専攻も様々な学生が大熊幼稚園（12名）と熊町小学校・大野小学校（13名）の教育支援を中心に、雪遊びや雪かきなども行う予定である。本学の学生と大熊の子どもたちの交流を通して、学び合う体験学習の機会をこれからも長期間にわたり作っていきたいと考えている。



小学校の先生方と記念撮影

6. 謝辞

本プロジェクトは、宮城教育大学附属・教育復興支援センター補助金を受けて行われた。本プロジェクトを実施するにあたり、大熊町教育委員会、大熊幼稚園の園長先生及び諸先生方、大野小学校、熊町小学校、大熊中学校の校長先生及び諸先生方には大変お世話になった。本稿執筆に際し、本学附属・小学校英語教育研究センターの渡邊巳紗子氏にお世話になった。ここに記して感謝を申し上げる。

